ボクと三人の淫ら妻

若妻饗宴日記

酒井仁
挿絵／Ｒ１

リアルドリーム文庫／PDF立ち読み版

KTC
KEEL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　プールサイドの美女……4
第二章　スパッツに浮かぶ淫らな花弁……50
第三章　若妻アヌス、燃える……88
第四章　野外セックスに乱れるロリータ妻……120
第五章　肉欲まみれの日々……171

登場人物

Characters

高取 晋一
（たかとり しんいち）

念願の一人暮らしを始めた19歳の大学生。総合スポーツ施設でバイトをしている。一見してもてそうな若者だが、男子校育ちで女性経験はない。

竹柴 かなめ
（たけしば かなめ）

夫と別居中の27歳の美人OL。抜群のプロポーションを保つためプールでアクアビクスに励む。自分の色気を自覚しており、若い男の子をからかうのが趣味。

藤野 さくら
（ふじの さくら）

最近ママさんバレーチームに入った、快活な若妻。24歳。いまいちチームの足を引っ張りがちなのを気にして、個人練習を積んでいる。

植松 塔子
（うえまつ とうこ）

旦那が単身赴任で一人暮らしをしている22歳の主婦。おっとりした性格で、テニスサークルのコーチ目当てで入会した友人に無理に付きあわされる。

『第一章　プールサイドの美女』より

亀頭の周囲に沿って舌先でくすぐるように、陰茎の味をじっくり味わう舌使いがたまらない。開いた唇を亀頭にかぶせてくわえ込むと、かなめの目元がポッと染まり、息が荒くなってくる。

「あむ、あふぅう……ん。若い子の味って濃厚でいいわ。うちの旦那も若いころはこんなだったのにね……あむ、ちゅるっ」

「えっ、だ、旦那って……うあぅうっ」

やおらディープスロートで呑み込まれ、鋭い快感に晋一は呻く。かなめは舌先で巧みに尿道をつつきながら、にんまりと陰茎をくわえたまま笑みを漏らす。

「んふぅ、言ってなかったかしら。私は結婚三年目、ただし子どもはいないし、旦那とも別居中だけどね。人妻ってわかってがっかりしちゃったかしら」

まさかの人妻宣言に晋一は言葉を失っていたが、沸き上がる興奮はむしろいや増すばかりだった。経験豊富で年下の男を誘惑する淫らな美人が人妻、他の男の配偶者だという事実は、少年の妄想力を激しく刺激する。

（本当ならかなめさんは旦那さんのものだ。けど、いまは違う。年下を誘惑するエロい人妻に、ボクがちんぽをしゃぶらせてるんだ！）

「あら、なんだか一段と大きくなったみたいな……きゃぁんっ」

むぎゅっ、もみゅ、むにゅううっっ！　無意識に伸びた手が、ハイレグ水着の上から豊かな乳房を鷲掴みにしていた。温かな湯の詰まった風船のような触感の中心に、こりっと堅くしこった部分が感じられる。そこを指先でつまみ上げるようにすると、かなめは身をくねらせて甘い声を上げる。

「あはぁ、んんっ。キミってもしかして人妻好きなの？　そんな大胆におっぱい揉みまくって……発情したオスの顔になってる」

「わ、わかんないですっ、けど、けどっ。ひ、人妻のかなめさんにちんぽしゃぶらせたいっ！　おっぱいも揉みたいですっっ」

晋一はかなめの後頭部に手を添えると、ずぶりっと根本まで勃起茎をねじり込む。かなめは一瞬苦しそうにしたものの、すぐに晋一の腰に腕を絡め、れるれると口中で舌を絡めてくる。そして残る片手で水着の胸の部分をずらすと、小さな突起物が露わになる。

月明かりに照らされた青白い肉球に、真一の目が吸い寄せられる。ぎゅむっと指を食い込ませ、弾力を確かめるとびくりとかなめの肩がふるえる。しまった、と思うが自分で自分が止められない。反り返ったイチモツで人妻の喉奥を深く貫きながら、張りのある巨乳を力任せに揉みしだく。

「あぁ、うあ、うあぁああっっ。気持ちいいっ、口の中もっ、おっぱいも最高に気持ちよくて、ボク、ボクッ」
こんな荒っぽく口と乳房を犯して、やりすぎかもしれない、嫌われるかもしれない。そんな考えが脳裏をよぎったが、身体の奥底から噴出するマグマのような肉欲に少年が抗しきれるはずもない。
夢にまで見た美女の口の中の温かさと唾液のぬめり、そして初めて生で触れた乳房の弾力に晋一は一気にエクスタシーの頂点にまで駆け上っていく。
「あぁああああっっ。出るぅ、精液でる、出ますぅううっ！」
どくんっ！　どく、どくんっ、どくん……どくん……っっ……!!
リクライニングに美女の身体をペニスで縫いとめるような格好で、晋一は再びかなめの口中に欲望の塊を吐き出していく。かなめの喉が上下に動き、晋一の白濁を嚥下していく。腰が空っぽになるような開放感。だが、自慰の直後のような虚脱感は訪れない。それどころかいっそう鋭く突き上げるような欲望が少年を支配していた。
「はぁ……ん。前のときよりたくさん出したんじゃない？　えっ……きゃあっ？」
「は、はぁっ！　はっ、あぁああっっっ」
人妻の唇から勢いよく陰茎を引っこ抜くと、晋一は指の跡の残る白い肉球にむしゃ

ぶりついていた。
露わになった乳首に吸いつきつつ、もう片方の球体も下から掴み、手の中いっぱいに収めた人妻の双球をぐいぐいと揉み上げる。かなめは苦しそうにリクライニングの上で身をよじったが、お構いなしに胸の谷間に顔をぐりぐりと擦りつけ、熱い吐息を吹きかける。
「やっ、ちょっ……！　待って、ちょっと落ち着い……っっっ。あ、はぁ……んっ。そんなに激しく乳首吸っちゃダメェエ……」
最初は戸惑ったようなかなめの声が、甘い響きを帯びてくる。
両腕で少年の頭をかき抱き、闇雲に乳房にアタックしてくる髪を優しく指で梳く。そして耳元に唇を寄せると、ねっとりと絡みつくような声で晋一に囁きかける。
「そう、おっぱいが好きなのね。いいわよ、好きなようにしても……」
その言葉に勢いを得たのか、晋一は口いっぱいにニップルを頬ばり、力いっぱい吸引する。下乳を持ち上げるように揉み上げ、乳輪の中央にこりっとしこった桃色の肉突起を指で挟んでコリコリと捏ねると、「あぁんっ」と悩ましい声を上げてかなめの甘やかな声が夜のプールに響く。
ちゅっ、ちゅば、れる……れろ、むちゅっ。

「はぁ、はっ。ちゅむっ、んふ、んふぅう……はっ、じゅる、ちゅるるっ」
「あぁ～っ、お乳いっぱい吸われてるぅ。もう、赤ちゃんみたいよ、キミ。やぁあんっ、これっ、き、気持ちいい～～」
年上女性を喜ばせる乳房への愛撫など、晋一にわかるはずもない。いや、愛撫しているという自覚すら晋一にはなく、ただただ目の前に捧げられた二つの神聖な肉球を本能のままに貪っていただけだ。それでもハイレグ水着の美女は稚拙な晋一の乳吸いに豊満な肢体をよじらせ、太ももをもじもじと擦りあわせる。
「こんな。こんなふうにおっぱい吸われたの久しぶり……ううん、は、初めてかも。もっといっぱい吸ってぇ、おっぱいちゅぱちゅぱしてぇえ～っ」
年下の男に乳を弄ばれて悶えているように見えて、二十七歳の人妻は貪欲だった。
リクライニングに横たわるかなめに抱きつくようにして、胸に顔を埋める晋一の足の間に手を伸ばすと、そこにぶら下がっている竿に指を絡めてしごいてくる。唾液と精液でねっとり濡れたそれは、大量射精のあとにもかかわらず、十分な固さと重量を維持したまま、少年の股間で重々しげに揺れている。
「あぁん、またこんなにおっきくなって、頼もしいのね。いいわ、そんなにおっぱいが好きなら、おっぱいでこれかわいがってあげる」

とびきりの悪戯を思いついたようなかなめの口調に、晋一は自らの唾液まみれになった顔を上げる。人妻は身を起こして髪をかき上げると、晋一を仁王立ちに立たせ、その前に膝立ちになる。深い胸の切り込みの部分から顔を覗かせたニップルは、明らかにさっきよりも大きく勃起している。夜の温水プールの静けさの中に、少年の荒い息と人妻の意味深なくすくす笑いだけが響く。

「あっ、あの、もしかしてそれって」

自分の腹部を見下ろす晋一の視線の先に、ふくよかに揺れる二つの乳房。かなめは上半身を晋一の下半身に重ねるように、両手で巨乳を抱え上げる。ボリュームのある肉球のちょうど谷間の正面に、天を仰ぐ肉棒がびくびくと痙攣している。

かなめは万事得たりとばかりに身体を近づける。すると谷間の中に勃起ペニスが埋没し、少年の若茎は人妻の淫らな乳房に挟み込まれてしまったのだ。

「パイズリされるのは初めてかしら。私の得意技の一つなのよ、これ」

つぅーっ。肉厚の唇から唾液が垂れ落ち、谷間の奥に消える。かなめの両手が肉球を揺すりながら持ち上げると「にちゅっ」と湿った音と共に、陰茎をひんやりとした肉が擦り上げる。

「う……ぁ、ああ……っ……」

手で握られるのとはまるで違う感触。頼りないような、それでいて四方八方から締めつけられ、逃げ場のない感じ。唾液のぬるぬるが乳房との擦過感を強調しているのがわかる。

感触だけではない。何より興奮するのは、年上の人妻の乳房に挟まれた自分の陰茎のビジュアルだ。くっきり深い谷間から亀頭だけが突き出て、また白い肉に埋もれていくのが、恐ろしく生々しい。

「うぅっ、おっぱいに、ぼ、ボクのちんぽが挟まれてる、こ、これがパイズリ？」

エロマンガではよく見るが、現実に陰茎を挟むには、並の乳房では無理だ。かなめの巨乳はまさしくパイズリのためにあるような乳だった。しかも自分の乳の扱いに、かなめは熟達している。器用に肉球を揺するたび、陰茎のあらゆる部分が刺激され、凄まじい快感が襲ってくる。

「くぅうっ、パイズリいいっ、気持ちいいですっ。うあ、ぁあっ」

「んふっ、キミだけじゃないわよ、私も……乳首がこすれて、あん、気持ちい……それに、このちんぽの臭いが刺激的で……あぁんっ、もう我慢できないぃっ」

ちゅぱっ。れろ、れろ、ちゅっ、ちゅぱっ。巨乳で晋一の肉竿を擦り立てながら、かなめは谷間から突き出た亀頭に唇をかぶせてくる。

口の中で高速回転する舌が亀頭の周囲をなぞり、頬をすぼめて強く吸引されると、それだけで二度目の射精感が込み上げそうになる。晋一は唇を噛みしめて、懸命に射精を堪える。

「あむっ、あふぅう〜っ。んちゅ、むちゅぅうっ、ちんぽおいひいぃ〜っ。それにっ、ち、乳首がキミのお腹で擦れて、あひぃいっ、いいっ、いいよっ！」

淫乱妻は、ただ乳房で少年に奉仕するだけではない。肉竿にむしゃぶりついて男の味を堪能しながら、堅くしこった乳首を晋一の下腹部に擦りつけて快感を貪っているのだ。

その貪欲さに圧倒されつつ、晋一も快楽の頂点に駆け上っていく。茎の部分を四方から締めつけて擦り上げる乳房、亀頭の裏側に当たるもっとも敏感な部分や、尿道を集中して責めてくる舌使いに翻弄され、為す術もなく責め立てられて「ひぃ、ひぃ」と情けない声が上がるのを抑えられない。

「むちゅっ、んはぁあんっ。パイズリ気持ちいい？　おっぱいでおちんぽしごかれて、ちんぽちゅるちゅる吸われて、ザーメン出ちゃいそうなの？」

「い、いいですっ！　かなめさんのパイズリ、めちゃくちゃ気持ちいいっ、気持ちよすぎて変になりそうですっっ」

晋一の素直な言葉に、淫らな人妻は頬を上気させて乳房をさらに激しく揺する。
摩擦で温められた唾液と汗が艶めかしい匂いを立ち上らせ、陰茎をねぶり回す唇から甘い吐息が晋一の下腹部を優しくそよぐ。月明かりの中で妖しく蠢く淫乱妻は、男を惑わすニンフのように晋一の目に映る。
（なんていやらしいんだ、かなめさん……こんな人のおっぱいに責め立てられたら、もう我慢なんて……できやしない……っ）
「あんっ、先走りのおつゆの臭いがするぅうっ。もうすぐ出るのね、ちんぽミルクどぴゅどぴゅ出したいのね、私の顔にぶっかけたいのね？」
卑猥語を口走る年上の人妻に対する嫌悪感は欠片もなかった。
それどころか込み上げる欲望は最初の射精のときよりも激しさを増し、たぎる欲望が下腹からせり上がってくるのを感じ、晋一は首をのけぞらせて叫ぶ。
「ぶっかけたいですっ！　あぁっ、出る、パイズリでザーメン出ちゃいますっっ！」
「きゃぁうんッ！」
びゅばっ！　びゅるるっ、びゅるっ、びちゃぁあっっっ‼
二度目とは思えないほど大量の樹液が噴水のように噴き上がり、二十七歳の人妻の顔面に撒き散らされる。べっとりとこびりついた白濁はゆっくりと垂れ落ちていき、

首筋に、鎖骨に、そして亀頭の突き出た乳の谷間に流れ込んでいく。
かなめは精液の熱さと臭いを堪能するように軽く目を閉じ、唇の周囲に付着した牡汁を、真っ赤な舌で「れろ……」とねぶり取って飲み下す。
「あ……んん……こんなに濃いザーメンが二回目だなんて、信じられない。それに、すごいわ。晋一くんのおちんぽ、萎えるどころかギンギンに勃起したままよ」
「うぁっ、ああぁっ」
そう言ってゆさゆさと乳房を揺すると、射精の余韻がぶり返してきて、晋一は腰をひくつかせて呻き声を上げる。確かに、自慰のときは二発も出せばさすがに萎えるのだが、今夜の自分は異様なほどに興奮していると思う。萎える気配はおろか、このまま何発だって発射できそうだ。
ただ、フェラチオ、パイズリと続いたあとは、少年の欲望はやはり口や乳房以外のところに向かわずにはいられない。童貞少年が憧れてやまない女性の神秘の中心、永遠の秘密の花びら。
（もっとしたいっ。本当の、本物のエッチまでしたい、させて欲しいっ。このまま押し倒して、かなめさんのおま〇こにボクのちんぽを突っ込んで、掻き回して、思いっきり射精したい！）

しかし、それを口にするのは躊躇われた。コンドームなど持ちあわせていないし、それ以上に女性経験がないということが少年を臆病にさせている。大学生にもなって童貞なのかと呆れられたり、そもそもセックスに成功するという保証がない。

頬や首に飛んだ精液をねぶり取りながら、見栄と性欲で自縄自縛に陥る晋一をしばらく見つめていたかなめだったが、ふと何かに気付いたような顔をして、にんまりとほくそ笑んだ。

「ねぇ晋一くん、キミって、もしかしなくても童貞よねぇ？」

「うっ、いぇっ、そ、そんなこと」

「あらそうなの、残念。わたし男の子の筆下ろしってしたことないから、興味あったんだけどなぁ～」

しまった、ともろに顔に出てしまう晋一の目の前で、かなめは首のうしろで水着の紐をほどく。ハイレグ水着の胸元が完全にはだけ、立ち上がるとするすると水着を足下に脱いでしまう。

「あ……ぅ、ぁ……っ」

窮屈な水着から解き放たれた美人妻の裸身はむき身のゆで卵のようにつるりとして、白い肌の上で月明かりが転がっている。

中に手を回すと、体操服の美女は身を預けてくる。
（む、胸が柔らかいや）
自分では謙遜していたし、確かにかなめほど巨乳というわけではない。
しかし元々が細身なだけに、さくらの乳房は女性らしい膨らみを晋一の胸板に伝えている。おそるおそる抱き寄せるほどに、体温と鼓動が伝わってくるようだ。
細いというよりも薄い腰を密着させ、スパッツに包まれた腰の上部に手を滑らせかけて、晋一はふと戸惑う。このまま、行くところまで行ってもいいものだろうか。すでに人妻であるかなめと一線を越えておきながら、変なところで理性が働くのが晋一らしいといえばらしい。するとさくらは唇を少し離して小首を傾げる。
「高取……晋一だっけ、どうした晋一？　もしかして不倫はよくない、とかいまさら言いだしたりするわけ？」
「ふ、不倫、なんですか。やっぱり」
そうよ、と短髪のハンサムな美人は事も無げに答える。
「藤野さくら、二十四歳。れっきとした旦那持ちよ、子どもはいないけどね。でも気にしなくていいよ。これはそう、ちょっとした息抜き、レクリエーションみたいなものなんだからさ」

二十四歳の人妻はキュートなウインクを投げて寄こすと、バレーの練習の続きでもするような気軽さでノースリーブのシャツをまくってブラを露わにする。思った通り形のいい膨らみをした乳房が曲線を描いている。

「こうすればさっきよりも感じない？　次は、んっ、下も触っていいよ」

再び晋一に身を預けながら、ちゅっ、ちゅっとついばむようなキスを頬や首筋に浴びせてくる。まるで小動物にじゃれつかれているような愛撫だが、スポーツ感覚で年下の男を用具室に連れ込んで誘惑するさくらには、似合っているような気がする。

晋一は左腕を人妻の腰に回して抱き寄せつつ、右手をスパッツに這わせていった。

ロゴの入った部分にひたりと手のひらを当て、ゆっくりと下ろしてゆく。直に触れると女性特有の肉付きと、締まった筋肉の躍動を感じる。手のひらを後方に回していくと、感触が少しずつ変化して、ヒップの柔らかみが増していく。

（ナイロン地だから体温が伝わってきて、裸のお尻を撫で回してるみたいだ）

普通スパッツの内側に下着を穿いているはずだが、よくわからない。薄い布越しに触っているからなのか、細かな筋肉の動きまでつぶさに感じられ、逆に直接触れるよりも興奮するくらいだと晋一は思う。普段はなんの気なしに体育館で眺めていたスパッツ姿だが、見ると触るとでは大違いだ。

「あ……はぅ……んっ。やだ、なんか気持ちいい。晋一って女慣れしてる？」
耳元で名前を呼び捨てにされるのが、妙に心地いい。晋一には上の兄姉はいないが、姉がいたらこんな感じなのだろうかと不思議な気分になる。
「慣れてなんかいません、その、気持ちいいんですか？」
「ああん。んぅっ、お尻の割れ目の奥まで、ダメェ」
布地ごと尻の割れ目に割り込ませようとしていた指を、慌てて引っ込める。
しかしまんざら嫌がっている様子でもないので、左右の尻たぶを円を描くように撫でさすると、さくらは腕の中で「ふん、あはん」と鼻にかかった声を漏らす。そして自分から腰を擦り寄せ、もっと触って欲しそうにしているのが、なんとも挑発的でドキドキする。
（熱っぽい身体から汗の匂いが漂ってくる。スパッツの上から撫で回されて、興奮してるんだ。なんてエッチなんだ）
と、腕の中で悶えていた人妻が顔を上げてにんまりする。晋一の股間の前、テントを張った部分をきゅっと握ってくる。
「うぅっ」
「さっきより大きくなってるよ、ここ？　そろそろ外に出してあげないと、だね」

ブラをはだけさせたままいったん身体を離すと、さくらは体操マットを一枚広げてそこに晋一を寝かしつける。晋一に跨る格好でジャージに手をかけると、「ずるんっ」と一気に引き下ろし、勃起した陰茎がこぼれ出た。亀頭はパンパンに張りきっていて、びくんびくんと脈打つそれを見て、人妻は満足そうに微笑む。

「いいモノ持ってるね、お口でしてあげようか。それとも、いきなりここに突っ込みたい？」

そう言ってスパッツに包まれた下腹部をそっとさする。そのあっけらかんとした物言いと過激発言に、晋一はごくりと生唾を飲み込む。どっちでもいいからとにかく一発発射したいのはやまやまだったが、手のひらにまだじんわり残っているナイロン地の感触が少年をさらに貪欲にする。

「さ、さくらさんのそこ……も、もっとよく見せて欲しいです」

少年のような腰に手を伸ばすと、短髪の人妻は意外にもちょっと照れたようなはにかみを見せてから、「いいよ」と言った。そしてマットの上の晋一の横に、逆向きに身体を横たえる。晋一の目の前に、黒のナイロン地がわずかに蒸れた匂いを伴って置かれる。

さくらは片方の膝を軽く折り、股間が見えやすいようにする。ふと顔の方を見ると、

そっぽを向いた目元は紅潮しているのが見えた。
「あ、あんまり見られてるときの顔は見せたくないから」
人妻の恥じらいに胸を高鳴らせながら、晋一はスパッツに顔を近づける。
一見、黒一色に塗り潰されたナイロン地には、微妙な凹凸があることが光沢の違いでわかる。骨盤の形というか、いわゆる恥骨のでっぱりと土手の膨らみとでもいうのだろうか。女体がより生々しく感じられるようで、晋一の鼓動はさらに高まる。
そっと太ももに手を当ててさすると、「ひくっ」と軽くふるえるのがいい。すらりと伸びた太ももを押し広げると、ナイロン地に密着した股間部分が、より鮮明に晋一の前に現される。
（この下に、おま○こがあるんだ。そういえば、かなめさんのおま○ことかあんまりじっくり見せてもらったことないなぁ）
かなめと何度も生本番した経験はあるが、女性器そのものをまじまじと見たことはない。それだけかなめに主導権を握られていたからだが、そうと気付くと晋一は猛然とさくらの局部が見たくなってきた。
（脱がそうかな、けどこの触り心地ももっと楽しみたいな。よしッ）
「きゃぅっ？　あんっ、スパッツの上からなんて……あ、あふぅんっ」

意外にかわいらしいさくらの嬌声にも構わず、晋一はスパッツの上から股間部に口を押し当て、れろれろと舌で局部をねぶり始める。最初はざらりとした感触だが、すぐに唾液が染み込んでナイロン地独特の舌触りが口の中に広がる。

上唇と下唇で土手を挟み込むようにはむはむと頬ばると、じんわりとしょっぱい匂いと味が感じられ、晋一の興奮が高まっていく。

「も、もう、意外と悪戯っこだな、晋一は。あたしも苛めちゃうからね」

と、むき出しにされた陰茎が生暖かい粘膜に包まれる。

「あむぅっ、こ、こんな格好のままで、んふっ、ス、スパッツ越しになんて」

さくらの口にくわえられたのだ、とわかると男根が熱く張りつめた感じになる。そういえばこういう体勢をシックスナインと言ったなぁと思いつつ、さくらのフェラチオに身を委ね、晋一は年長の股間を味わい続けた。

「れろ、れろ……むちゅっ、ちゅぱっ。こ、こんなの、初めてかもぉ」

お互いの局部を口で愛撫する、湿った生々しい音が体育用具室に響く。体育館の灯りを消したいま、他の職員たちに気付かれる心配は少ないとはいえ、バイト先でこんなことになってしまっている状況は、晋一の背徳感と興奮を煽る刺激材料だ。

（年上の女の人って本当にエロくてたまらないよ。あぁ、唇がちんぽを擦り立てて、

なんて気持ちいいんだ）

ねっとりと舌を絡めてくるかなめのフェラチオと違い、さくらは盛んに首を振り立てて、唇で肉茎を摩擦してくる。亀頭への刺激が少ないので射精はなんとか我慢できるが、まるでスポーツ競技のような激しさにペニスもびくびくと跳ね上がるほど刺激される。

「んっ、ちんぽ美味しい……もうおつゆが滲んできてる。んっ、ちゅっ、遠慮しないで、口の中に出してもいいよ」

「は、はい……んちゅ、れろ……っ」

そう言われても、しゃぶられてすぐに果ててしまうのは体裁が悪い。晋一は下腹に力を込めて射精を堪えつつ、人妻のスパッツへの責めに専念する。

唾液をたっぷり吸い込んだスパッツは光沢を増している。下に穿いているはずのパンティラインを指で確認しようとしたが、丹念に撫で回してもそれは感じられなかった。まさか、と晋一は息を呑む。

（こ、これってまさかノーパンなのか。下着も穿かずに、ちょ、直接スパッツを？）

スポーツする女性はみんなそうなのか。いや、そんなことは聞いたことがない。ふと下に目をやると陰茎をくわえ込んだ人妻がにんまりしながら晋一を見上げている。

ノーパンに気付かれて恥じらっている顔ではない、むしろ「どう、あたしノーパンなのよ。スパッツの下はすぐにおま○こなのよ」と誇示している表情だ。
（おま○こに直接スパッツを穿いてバレーの練習しながら、その感触を楽しんでいたのかも。ひ、人妻ってやっぱりエッチだっ）
この薄い生地のすぐ下に女性器があるとわかると、晋一は猛然と鼻息を荒くして大量の唾液を布地に浸透させ始めた。そうすることで薄いナイロンは透明度を増し、より裸体に近づくことに気付いたのだ。
「はふ、はむぅ、むちゅっ、れろッ」
腕を太ももに回して抱え込み、顔を股ぐらに突っ込むような体勢で、若妻の足の付け根を丹念にねぶり続ける。
その刺激に時折「あん」「んふぅ」と甘い声を漏らし、腰をくねらせる反応が少年をいっそうハッスルさせる。しかも、舌を這わせ唾液を染み込ませるほどに、布地の奥から潮と汗の香り、そして動物的な牝の臭いが晋一の嗅覚を刺激するのだ。
（おま○こ の匂いと、それに味だ。さくらさんの旦那さんも、この匂いや味を知ってるだろうか。知ってるに決まってるよな、こんなにエッチなんだから）
人妻と淫らな行為に及ぶ喜びというものに、晋一は気付きかけている。

かなめにしろさくらにしろ、晋一が顔を合わせたこともないどこかの男性と婚姻し、身体を重ねている。晋一が陰茎を突っ込んだ膣も、舌で転がした乳首も、揉みくちゃにした尻も夫が先に手をつけ、楽しんでいたに違いないのだ。その事実は晋一の胸に抗いようもない嫉妬と、それをこっそり横取りしているという優越感を植えつけ、単なる肉体的快楽以上の彩りを与えるのだ。

現に、人妻であるさくらはいま、数時間前に会ったばかりのバイト学生の陰茎をしゃぶり、夢中で首を振り立てている。貪欲な唇が肉茎を擦り上げ、その快感に晋一はスパッツから口を離し「あぁっ」と切ない声を漏らしてしまう。

「んふふっ、あたしのフェラチオ気持ちいい？　晋一が上手にアソコを舐めてくれるから、あたしもつい夢中になっちゃった」

上気した顔を向け、にっこりと微笑む。バレーの練習に熱中しているときと同じだと晋一は思い、あらためてさくらの淫らさにわくわくしてくる。

「さくらさんのフェラチオ、すごくいいです。それに、おま○この匂いも。か、感じてきたりしてますか？」

晋一の目の前の布地には、すっかり大きな染みができ上がっている。晋一の唾液のせいばかりではない、明らかに内側からじっとりと別の液体が滲んで来ているのだ。

盛り上がった土手の部分を指でそっと押すと、さくらは「うぅん」と悩ましい声を漏らして尻をひくひくふるわせる。
「感じてるよ、さっきからずっと……お腹の奥に火が灯ったみたい。スパッツの上からだから少しもどかしいけど、それがまたたまんない……」
そう言って目を細めると、再び陰茎の先端を大きく頬ばり、頬が亀頭の形に膨れる。じゅるると唾液を啜り上げてくる淫らなフェラチオに射精感が込み上げてきそうになり、晋一は股間に口を押し当てて気を紛らわせる。
「はぁっ、あ、うぅうッ！　さ、さくらさんのおま○こ、おま○こっ」
「んぅうっ、あっ、あぅんっ。もっとおま○こねぶって！　いい、気持ちいいっ」
晋一の口中に、明らかに唾液とは違う味が広がっていく。
花弁から滲み出る蜜液の量が見るからに多くなっている。ちゅうちゅうと頬をすぼめてしがむと、しょっぱくて熱い潮の味がする。指をVの字に広げて足の付け根に押し当てると、下着を着けていないナイロン地の光沢の上にくっきりとある形が浮かび上がった。
（か、貝の身……いや、花びら……？　ぷっくりしてて、肉厚の、こ、これがおま○こ……なんだ……！）

初めてまじまじと見つめる人妻の花弁は、自然の造形が生み出した奇跡のように思える。合わさった肉ひだの中央部分を指で押すと、窪んでいるのがわかる。この奥に膣穴があって、そこにペニスを突っ込むのだなと、いちいち感心してしまう。

（ええと、じゃあこの辺にあれが）

土手に向かって指の腹で擦り上げていくと、ある部分で「びくんっ！」と大きな反応があった。肉棒をくわえ込んだまま「んっ、むふぅんん」と切なげな声が漏れ、やはりクリトリスを探り当てたことを知る。

（クリトリスは一番敏感なところだってかなめさんも言ってたな。形までわかるかな？）

晋一は布地をぎゅうと密着させ、人妻の土手を凝視する。愛液でぐっしょり濡れたナイロン地はつやつやとてかり、いやらしい肉厚の隠唇を浮き上がらせるが、クリトリスらしきものはわからない。舌でなら感じられるかも、と晋一は唇をすぼめ、クリトリスと思しき場所にちゅっと吸いついて舌先を動かしてみる。

「んぅうっ！　ふぁっ、そこっ、く、クリちゃん感じるぅっ。あむ、んむふぅっ」

その言葉に後押しされ、少年は尖らせた舌先で肉芽を器用にほじる。と、柔らかな肉の中に微かにこわばった突起らしきものを感じる。これがクリトリス、女のペニス

Misakayama

かと、かあっと頭の奥が熱くなる。
「むふぅうっ、んはっ、す、吸われてるぅ。クリちゃんちゅぱちゅぱされて、感じちゃうよっ」
ちゅぱっ、むちゅ、れろれろっ、じゅるじゅる……じゅるっ！
膣の窪みに鼻面を埋めながら、晋一は人妻のいやらしい肉芽を集中的に舌で弄ぶ。じゅわっと滲み出るま○こ汁で鼻の頭が湿るが、晋一は発情期の犬のように舌でそれをねぶり、再び鼻をぐりぐり擦りつけてやる。
「あぁんっ、いいよ、クリちゃんがじんじんしちゃう！　こんなの久しぶり……んちゅぅ、おちんぽもおいひぃ……じゅるっ、ちゅぷっ」
陰茎の根本に指が絡みついてきて、さくらはしごきながら亀頭をれろれろねぶり回す。ひんやりした手のひらの感触と熱くぬめった口の中が対照的で、陰嚢がきゅっと縮み上がりそうだ。
「うぁあっ、フェラチオすごっ。そんなにしたら出ちゃいますっ」
「はむぅんっ、いいよ出しても！　おま○こペロペロされながらザーメン飲まされるなんて、ドキドキするぅっ！」
淫乱妻の顔を見せるさくらの淫らな笑みに、電流のような快感が走り抜ける。

限界を迎えた陰茎の根本から、凄まじい射精感が込み上げてくる。晋一はさくらの腰にしがみついて、スパッツに浮き上がった肉の花びらに顔面を押しつける。熱い吐息と共に漏れる「ぅあぁぁああ〜〜っっっ」という快美の声が、濡れた肉ひだをふるわせ、人妻のスレンダーな肢体を痙攣させた。

「うあぁぅううっ、出る、出るぅううっ!!」

「んんぅううっ、んく、んぐぅううっ!」

どく、どく、どくん……っっ。びくっ、びく、びく……ん……っ!

勃起した肉竿の中を熱い塊が駆け上り、砲弾のように続けざまに撃ち出される。粘っこいゼリー状の粘液がスポーティーな若妻の口の中に注ぎ込まれ、さくらは無言のまま肩をこわばらせてそれをすべて受け止めたのだった。

あまりの射精の快感に晋一は声も出せない。ただムッと蒸れるスパッツの股ぐらに顔を埋め、熱帯雨林のような雌臭を胸いっぱいに吸い込む。

(うっ、おま○この匂いが酸っぱくてきつくなった?)

夢うつつでさくらのま○こ臭を嗅いでいると、下の方から驚きの声が上がる。

「んっ、むぐ……っ。やだ、すごい。息が詰まるかと思うほど出したのに、全然萎え

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!